



TITLE:

学生の声

AUTHOR(S):

CITATION:

学生の声. Cue 2004, 14: 75-75

ISSUE DATE:

2004-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/57877>

RIGHT:

学生の声

「博士後期課程への進学」

情報学研究科 システム科学専攻 松田研究室 博士課程2回生 笈田 武 範

私が博士後期課程に進学した最も大きな理由は、自分が興味を持つ研究を行う上で非常に良い研究環境を、現在所属している研究室が提供してくれていたことにあります。私は大学入学時より、計算機科学やプログラミングに興味があり、これらを医学や医療に応用する医用画像や医用VRシステムというものを知り、興味を持ちました。私が所属する松田研究室は、このような医学・医療における工学や情報学の応用を目指す医用工学という領域の研究を行っており、私は当研究室において生体組織の弾性を磁気共鳴画像法(MRI)を用いて計測する研究を行っております。当研究室では、この他にも生体シミュレーションやヒト胎児標本データベースの構築など、医学・生物学と工学・情報学の融合が重要となる研究を行っており、様々な分野の研究者の方々と連携して研究を進めています。これは、研究活動を始めて間もない学生にはとても良い環境だと思います。全く異なる分野の研究者の方々と議論したり、お話を伺ったりできることは、研究を進める上でも非常に参考になりますし、知識も広がります。

また、研究を進める中で自分の考えを形にし、実験を通してその有効性を確認していく過程のおもしろさも進学した理由の一つといえます。これは、企業に入って研究・開発を行っていても同じなのかもしれませんが、大学は時間や資源利用に対する自由度が高く、自分のやる気次第で主体的に研究を進めることができます。実験の結果が思い通りにうまくいくこともあれば、全然見当違いの結果になることもあり、あまりうまくいかないことが続くと、これから研究者としてやっていけるのか不安になることもあります。しかし、指導教官や共同研究者の方々に意見や批判をいただき、研究のさらなる発展を目指すのは、とても楽しく、貴重な経験になっていると思います。

「謙虚に野心をもって」

工学研究科 電気工学専攻 超伝導工学研究室 博士課程1回生 東 川 甲 平

「君、博士課程に進むつもりはない？」
指導教官の何気ない、いや、私にとっては何気なくおっしゃられたように聞こえたその一言が、私の頭のとっぺんをチクリと刺しました。不意を突かれた心地でした。当時の私の人生設計は、普通にサラリーマンになり、3年くらい経てば結婚して、できれば子供も授かって、願わくは出世して…そのような平凡なものでしたから。私は悩み始めました。決め手が出て来ないので、いつもやるようにメリットとデメリットを正直に挙げてみることにしました。

●博士課程に進学するメリット：

- 何かを発明したい、発見したい、解明したいという研究好きな私の性に合っていること
- 研究の世界では、経歴や肩書きが全てではなく、平等にチャンスが与えられること

●博士課程に進学するデメリット：

- いわゆるクラスの天才グループには所属していなかった自分がやっていける自信がないこと
- 同級生が社会人として立派にやっている一方、学生であり続けることに引け目を感じる
- 勝手な予想だが、就職するよりも出会いが少なそうなこと

3ヶ月間考えた末、私は進学への道を選びました。メリットは変わらないことですが、デメリットは覚悟さえあれば克服できることばかりだったからです。せっかく選んだ道です。楽観的な私は、デメリットを他の表現に言い換え、メリットを修飾することにしました。博士課程に進学する私は、謙虚で控えめにしつつも好きな研究で一花咲かせようと…尚、最後の項目については解決済みです。今年度秋、私は博士課程1回生25歳にして1児の父になりましたから。

博士課程はやはり厳しいところですが、私は今の生活を本当に満足して過ごしております。学会で賞を頂いたり、論文がジャーナルに掲載されたりした時には、自分の存在意義を確認できたみたいで、うれしさのあまりに顔が火照ってきます。そのような生活は、いつも気にかけてくださる先生方、両親や家族の理解なしでは成立しないことであり、本当に感謝しております。皆様の期待に応えられるよう、「謙虚に野心をもって」をキーワードに頑張っていきたいと思っています。